１日目　13:30～16:30

シンポジウム

ウイズコロナ、ポストコロナの教育経営

・課題設定の理由

ウイズコロナ、ポストコロナの時代に向けて「知」の在り方が問われている。パンデミックに「知」をもっていかに立ち向かうか。私ども一人一人に突き付けられた課題である。

２０２０年、新型コロナ感染症の拡大にともない、われわれは、これまでとは異なる環境に自らを置き未知の体験に迫られることなった。その過程で認識を迫られることになった一つにコロナウイルスの“毒性”がある。人々の生命に危機をもたらすのみならず、システムやマネジメントの劣化や機能不全を引き起こし、社会の分断や崩壊をもたらす“毒性”。これをどうとらえ、いかに向き合っていくかが問われた。

新型コロナ感染症は、教育をめぐるシステムやマネジメントに何をもたらしたのか。また、これから何を引き起こそうとしているのか。改めて、これまでを振り返り、事のありようを突き詰めていくことが取るべき立場ということになる。

千葉県の場合、事の始まりは次のようであった。２０２０年２月２１日（金）千葉市内の中学校教員の感染が判明。同夜、当該校の生徒などに向けて外出の自粛、土曜、及び、連休の３日間をはさむ２５（火）・２６（水）の休校が伝えられた。千葉県の教育関係者にとってコロナ感染が身近に迫ってきたことを実感させる一幕であった。

また、市川市においては、２月２５日（火）県内で感染者のうち３人が市内スポーツジムの利用者であったことが、さらに、同施設を市内学校の教職員４名が利用していたことが明らかとなり、市内の小中学校などすべてを２月２８日から３月１２日まで臨時休業とするとして、２７日（木）午前、村越祐民市長より公表された。同日夕刻、安倍首相による「全国一律」の小・中・高の一斉休校の要請に先立つ動きであった。

一方、学校においては、休校の長期化にともない、学習保障をめぐって試行錯誤が繰り広げられ、様々な教材・教具の開発が促されることになった。千葉大学教育学部附属小学校もその一つであり、同校はICTの利用に活路を求めてオンラインによる授業と学習を成り立たせる取り組みを進めた。

これら動きについて、研究の立場から、また、実践の立場から、何が読み取れ、何が言えるのか。感染拡大防止と諸々の社会的活動の両立が問われるなかにあって、これからの教育に関わるシステムやマネジメントはどうあるのか。ウイズコロナ、ポストコロナの時代における教育経営をめぐり、その在り方を探りビジョンを描いてみたい。

＜シンポジスト＞（敬称略）

田中　庸惠（千葉県市川市教育長）
大木　圭（千葉大学教育学部附属小学校副校長）
佐藤　博志（筑波大学）
水本　徳明（同志社女子大学）

＜司会＞

天笠　茂（千葉大学）
元兼　正浩（九州大学大学院）